第７課　パウロの第一次伝道旅行

【暗唱聖句】

「だから、兄弟たち、知っていただきたい。この方による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、信じる者は皆、この方によって義とされるのです」使徒13:38，39

【今週のテーマ】

今週はパウロの第一次伝道旅行について学びます。

【日曜日・サラミスとパフォス】

使徒言行録13章ではパウロの第一次伝道旅行について描くにあたって、アンティオケに場面を戻します。そしてこの後の使徒言行録の記録はすべて異邦人伝道に焦点があてられていきます。またその働きは入念に計画された最初の宣教努力ですが、すべてのことは神様を源とし、神様に用いていただくところに身を置くときはじめて、神様は働くことがおできになることを教えています。

「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」 そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた」使徒13:2，3

第一次伝道旅行としてバルナバとサウロ（パウロ）最初に訪れたのはキプロス島でした。この島にはすでに福音が届いていましたが、まだなすべきことが色々ありました。そしてそのために教会は断食して祈ったことが描かれています。興味深いのは、主のご計画を告げたのも、キプロス島に送り出したのも（使徒13：4）聖霊であると書かれていることです。神様の働きは、聖霊がその背後で常に動き、わたしたちを動かしていることがわかります。

パウロたちがキプロス島に到着すると、サラミスという町のユダヤ人の会堂で、まずメッセージを語りました。イエスはイスラエルのメシアなのだから、パウロは伝道旅行において最初にユダヤ人の会堂でイエスはメシアであることを語るのです。パウロ自身がそのことを悟り目が開かれたように、一人でも多くの同胞が真理に目が開かれてほしいと願ったのでしょう。

その後も福音を述べ伝えながら、首都のパフォスに到着します。そこで2人の人物が登場します。一人は魔術師で偽預言者のバルイエス（エリマ）、もう一人は地方総督セルギウス・パウルスです。バルイエス（エリマ）がパウロたちの働きを妨害しようとすると、たちまち主の御手がくだり目が見えなくなってしまいます。それを見た総督は、驚き主を信じるようになります。

【月曜日・ピシディア州のアンティオキア（その1）】

キプロス島での伝道を終えたあと、現代のトルコ南岸にあるパンフィリア州ペルゲにわたります。そしてピシディア州のアンティオキアに移動する前に、ルカはサウロをパウロと呼び、バルナバより前に名前をあげることで、異邦人伝道の主役に位置付けて描写するようになります。また使徒13:13では、第一次伝道旅行のメンバーだったヨハネ・マルコが待ち構える困難さに不安に陥り離脱していきます。神様は伝道の働きは簡単であるとは約束なさいませんでした。それは様々な困難さを伴うものであり、それゆえに神様の力に100％頼り切る信仰が重要となるのです。パウロはこの強さの秘訣を学んでいました。

一行はピシディア州のアンティオキアに到着し安息日に会堂に入ると、会堂長たちから何か励ましになる言葉を語ってくれるようにと頼まれます。そこで立ち上がったのはパウロでした。パウロはここで3つのポイントでメッセージを語ります。１つ目はユダヤ人クリスチャンとの接点を築くことを意図して、「イスラエルの神は、わたしたちの先祖を選び出し」と語ります。2つ目に「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださった」（使徒13：23）ことを語ります。そして3つ目は結論として、「この方（イエス）による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、信じる者は皆、この方（イエス）によって義とされるのです」（使徒13:38～39）と、イエス・キリストが救い主であることを語ります。

【火曜日・ピシディア州のアンティオキア（その2）】

パウロはイエス・キリストに対する信仰によってのみ義とされるという、従来のユダヤ教の教えとは違う福音のメッセージを語ります。話を聞いた人々の反応はとても良いものでした。そして「パウロとバルナバが会堂を出るとき、人々は次の安息日にも同じことを話してくれるようにと頼」（使徒13:42）み、さらに「集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者とがついて来たので、二人は彼らと語り合」（使徒13:43）ったのでした。そして驚くべきことに、「次の安息日になると、ほとんど町中の人が主の言葉を聞こうとして集まって来た」（使徒13:44）のでした。なお、神をあがめる改宗者というのは、割礼を受けていないので正式なユダヤ教徒ではないけれども、神を信じあがめる異邦人たちのことで、彼らの影響によって多くの人々が集まってきたと考えられます。

ところが二人に反対する者たちもいました。それはユダヤ教の指導者たちでした。反対する理由の多くは妬みから来ていたようです。

「ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した」使徒13:45

真摯に聖書の真理を知ろうというのではなく、妬みのような感情的な理由から反対が起こることは決して不思議なことではありません。今日でも同様の理由でキリスト教に対する反対が起こることが少なくありません。

【水曜日・イコニオン】

パウロ一行は、アンティオキアのあとイコニオンという町に向かいます。イコニオンに到着すると、まず慣例にしたがって、「ユダヤ人の会堂に入って話をし」、「その結果、大勢のユダヤ人やギリシア人が信仰に入」ります（使徒14:1）。パウロは自分と同様に同胞たちが真理に目が開き、回心するという希望を捨てていませんでした。ローマ人への手紙を見ると、「現に今も、恵みによって選ばれた者が残っています」（ローマ11:5）と語っていることからもわかります。

　しかし、ピシディア州のアンティオキアと同様に、「信じようとしないユダヤ人たちは、異邦人を扇動し兄弟たちに対して悪意を抱かせ」（使徒14:2）ます。そして、「町の人々は分裂し、ある者はユダヤ人の側に、ある者は使徒の側につき、異邦人とユダヤ人が、指導者と一緒になって二人に乱暴を働き、石を投げつけようとしました」（使徒14:4、5）

　この結果、パウロたちはイコニオンを離れて、リカオニア州の町であるリストラとデルベに向かうことになります。

【木曜日・リストラとデルベ】

リストラはイコニオンから29キロほど離れたへんぴな村で、そこでパウロは足の不自由な男性を癒す物語だけが記録されています。

「この人が、パウロの話すのを聞いていた。パウロは彼を見つめ、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認め、「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした」使徒14：9，10

パウロはこの足の不自由な男性を見つめます。そして癒されるのにふさわしい信仰があるのを認め、「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と言います。すると、その人は踊りあがって歩き出したと続きます。この癒しの物語は今までにない癒しが起こるときのポイントについて触れています。それは癒される側の信仰です。パウロはその男性を見つめ、癒されるだけの信仰があると認めました。そして祈るわけでもなく、ただ「自分の足でまっすぐ立ちなさい」と大声で言うのです。その声に反応して男性は立ち上がります。癒しは祈る人の信仰がポイントとなることもあれば、癒される人の信仰がポイントになることもあります。いずれにしても神様の働きなのですが、興味深いところです。また、パウロには人の信仰を見抜く霊的な洞察力が、この時点ですでに備わっていたようです。

　さて、この出来事のあと、町の人々は驚いて、バルナバを「ゼウス」と呼び、またおもに話す者であることから、パウロを「ヘルメス」とギリシャ神話に出てくる神々の名で呼び、二人にいけにえまで捧げようとします。パウロは自分の服を裂いて、「なぜこのようなことをするのか」と、自分たちを礼拝するのを止めさせますが、そのくらい圧倒的な出来事だったのでしょう。

　その後、再び迫害者たちがやってきたのでデルベ向かい、そこで福音を伝え、その後再びリストラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返していきます。その道中、弟子たちを励まし、長老を任命してそのために断食して祈りました。